

# 最も重要な論点——聖書的な男女の平等をめぐる議論で本当に大切なこと

アンドリュー・バートレット (Andrew Bartlett) 著 (ドイツ語訳: Hans-Jörg Ronsdorf [www.frauen-vergebt-uns.de](http://www.frauen-vergebt-uns.de))

専門的な議論は膨大で、かなり混乱させるものになりかねません。しかし、いくつかの重要な中心的論点があります。鍵となる箇所において、補完主義の解釈は聖書から逸れているか、あるいは実際には聖書に書かれていないことを聖書に付け加えているのです。

## はじめに

補完主義者と平等主義者の間の議論は、聖書が何を教えているかについての相反する意見の**茂み**であり**沼地**です。「補完主義者」は、男性と女性は神の前では等しいけれども、とりわけ結婚と教会において男性が女性を導くことが神のみこころである、という見解をとります。「平等主義者」は、男性も女性も指導の務めを担うことができる、という見解をとります。

そこには、聖書中の言葉や箇所の意味についての相反する意見と、聖書が語っていることの歴史的・文化的背景についての相反する意見が含まれます。

補完主義者の標準的な著作である、ジョン・パイパー (John Piper) とウェイン・グルーデム (Wayne Grudem) 編の **Recovering Biblical Manhood and Womanhood** は、684ページあります (2021年の印刷版)。グルーデムの大著「**Evangelical Feminism and Biblical Truth**」は856ページです。マイク・ウィンガー (Mike Winger) による「**Women in Ministry**」をテーマとした最近の動画シリーズは、再生時間が43時間に及びます。

議論の平等主義の側、あるいは相互主義の側では、フィル・ペイン (Phil Payne) の著書「**Man and Woman, One in Christ**」が、パウロ書簡だけに焦点を当てていながら、500ページを超えています。ロン・ピアス (Ron Pierce)、シンシア・ウェストフォール (Cynthia Westfall)、クリスタ・マッカーランド (Christa McKirland) 編の「**Discovering Biblical Equality**」の第3版は698ページです。

さらに、議論の両方の側に、ほかにも数多くの本があります——たいていは200ページから400ページほどの分量です。

私の新しい本「**True Complementarity: The way of Christ for men and women**」(2026年10月刊行予定)は、こうしたさまざまな論拠のすべてと取り組んでおり、そのため、グルーデムの大著とほぼ同じくらいの分量になっています。

もしあなたに、こうした資料すべてを研究し、吟味する時間と召しがあるなら、それは良いことです。しかし、そうでないならどうでしょうか。自分の人生で、すでに抱えきれぬぎりぎりのものを抱えている信者はどうでしょうか。もともと忙しすぎて、ついていだけで精一杯の牧師はどうでしょうか。

この記事での私の目標は、議論全体の中から**重要な論点**と**最も重要な論点**を取り出すことです。

**重要な論点**とは、最もはっきりと相互主義の立場——互いに等しく、対等な立場——へと導く論点のことです。それから私は、重要な論点の中から**二つの最も重要な論点**を取り上げます。それは、それ自体だけで補完主義の立場の土台を崩すと私が考える、二つの中心的な論点です。もし、相互主義者がなぜ補完主義の立場を退けるのかを説明する時間が一分しかないとしたら、挙げるべきなのはこの二つの論点でしょう。

私の願いは、この記事によって、補完主義の兄弟姉妹たちがもっと良い場所にたどり着く助けとなることです。その上には空がもっと柔らかな青に広がり、その下には大地がもっと美しい緑に広がる場所へと。

まず、相互主義の立場を積極的に提示します。

続いて、補完主義の立場が聖書の語ることから逸れている十の本質的な論点を説明します。おおむね正典の順序に沿って扱いますが、結婚と奉仕を区別するのが理にかなっているので、厳密にその順序どおりではありません。これが内容の大部分を占めることになります。

最後に、二つの最も重要な論点を取り上げます。一つは、テモテへの手紙第一2章12節におけるパウロの言葉の選び方にかかわるものです。もう一つは、補完主義者が男性に課していることを行うようにと神が男性に命じている指示が存在しない、ということにかかわるものです。記事の終わりには、なぜこの二つが最も重要な論点なのかがおわかりになるでしょう。

## 相互主義の見方

男性と女性についての相互主義の見方は、補完主義の学者たちも同意している共通の土台から出発します。その共通の土台とは、女性についての伝統的な多数派の見解を退けることです。

歴史的に見ると、女性は男性に従属させられてきました。この従属の主な理由として挙げられたのは、女性の劣等性でした——女性は本性的に劣っていると見なされ、それゆえ地位においても従属すべきだとされたのです。その本性的な劣等性のゆえに、女性は生活のあらゆる領域で——社会と公的生活において、家庭において、そして教会において——男性に服従すべきだとされました。

女性の知性と道徳的能力を貶めることは、風変わりな少数意見ではありませんでした。それは支配的な見解だったのです。私たちは、アレクサンドリアのクレメンス（Clemens von Alexandria）、アウグスティヌス（Augustinus）、トマス・アキナス（Thomas von Aquin）、ルター（Luther）、カルヴァン（Calvin）、さらにはウェスレー（Wesley）といった、キリスト教界の偉大な名前を引用することができるでしょう。

例として、指導的なピューリタン神学者リチャード・バクスター（Richard Baxter）が1665年に書いたことを引用しましょう。彼は男性たちに、結婚する前に、女性の本性を前にしてどれほどの忍耐が必要になるかをよく考えるよう勧めています。

「女性という性の生まれつきの弱さがあなたがたに求める忍耐は、決して小さなものではない。忍耐強く男らしい少数の者を除けば、女性は一般に想像力がたくましく、繊細で、情に流されやすく、短気であり、たやすく怒りや嫉妬や不満に傾く。そのうえ理解力が弱く、それゆえ自分で自分を改めることができない。彼女たちは男と子どもの中間にある。少数の者は男のほうに多く寄り、多くの者は子どものほうに多く寄っている。しかし大部分は、ただ中間の状態にあるにすぎない。」（バクスター、A Christian Directory, Teil 2: Christian Economics、第1章）

女性についてのこの見方は極端なものではありません。むしろ普通のものでした。

相互主義の学者も補完主義の学者も、この伝統的な見方を正しく退けています。この見方は神のことばから導き出されたものではなく、人間の哲学と文化から導き出されたものです。

教会の歴史には、多数派の見解に異を唱える尊敬すべき声もありました。たとえば4世紀に、大バシレイオス（Basilius der Große）は、女性が本性において道徳的にも知的にも男性と同等であることを力強く主張しました（バシレイオス、*Über den Ursprung der Menschheit* [『人間の起源について』、第1講話）。しかし、女性は本性的に男性に劣るという多数派の見解は、非常に根強く残りました。

何世紀にもわたる議論、とりわけ17世紀から20世紀にかけての議論を経て、教会における多数派の見解は、1980年代の終わりにはついに変化していました。それは、聖書に表されているとおり、女性の本性が男性の本性と——道徳的にも知的にも——真に等しいことを認める方向へと転じたのです。

主イエスは、ご自分の教会をきよめることをあきらめてはおられません。

## 創世記

女性についての修正された見方の土台となるのは、創世記1章26–28節です。そこでは男性も女性も神のかたちに造られ、神の被造物を共に治める者とされています。

さて、神のかたちに造られた完全な人格としての平等は、男性と女性が同じであることを意味しません。神は私たちを男と女に造られました。ですから男性と女性是不一样的です。彼らは真に補い合うのです。

まさに男性と女性の違いのゆえに、私は「平等主義者」という用語ではなく「相互主義者」という用語を使います。残念ながら、「平等主義者」という用語を、男性と女性と同じだという誤った主張だと誤解する人々がいるのです。

これについては、聖書の視点が必要です。

- 神のかたちに造られた人間であることが第一であり、男であること・女であることは重要ではあるが、第二のことです。

神が動物も雄と雌に造られたことを思い出しましょう。しかし動物は神のかたちに造られてはいません。神のかたちは、私たちの性の違いにあるのではなく、私たちが人間であることにあるの

です。

創世記1章28節で男性と女性が共同の支配者とされた後、「支配」という主題が次に出てくるのはどこでしょうか。創世記3章16節です。そこでは人間が道を踏み外し、神に背いています。神は女性に、背きの結果は男の支配であろうと警告されます（「彼はあなたを支配することになる」）。

生きていく上での現実として、男性は女性よりも大きな筋力を持ち、また男性は子どもを産みません。ですから、人間が神に背き、自分自身を第一にすることを選ぶなら、それはたいてい男性が女性を支配することにつながります。それが創世記3章です。

しかし、創世記1章における神の本来の計画は、男性の支配（男性が女性を治めること）ではなく、共同の支配（男性と女性が被造物を治めること）だったのです。

## 旧約聖書全般

旧約聖書は、神の御霊が働くところでは、女性が指導の務めを担うよう召されていることを証しています。

ここで私たちは、ミリアム（出エジプト15章、民数12章、歴代誌第一6:3、ミカ6:4）、フルダ（列王記第二22章、歴代誌第二34章）、そしてとりわけデボラ（士師4-5章）を思い浮かべることができます。

旧約聖書の王の時代より前には、民の最高指導者、預言者、最高の裁き手、そして最高司令官の役割を一身に兼ね備えた、神によって立てられた指導者は三人しかいません。モーセ、サムエル、そしてデボラです。

神は、女性が指導的な地位に就くことに反対してはおられません。女性も男性と同じように神のかたちに造られているからです。

## イエス

1世紀のユダヤ文化では、ほかの場所と同様に、女性は道徳的にも知的にも男性に劣ると見なされていました。しかしイエスは女性を二級の人間として扱われませんでした。イエスは女性たちを、男性たちと並ぶ正式な女弟子として受け入れられたのです。

福音書の中でイエスは、弟子たちにどのように生きるべきかを教えておられます。その教えの中で、イエスは男性の生き方と女性の生き方を区別しておられません。

では、イエスが十二人の使徒を——全員男性を——召されたことは、どう説明すればよいのでしょうか。

それは時代に結びついたやり方でした。それは十二人の族長を思い起こさせる象徴だったのです。イエスの時代、イスラエルにはもう何百年も前から十二部族は存在していませんでした。十二人の男性を周りに集めるという象徴的な行為は、イエスが今やご自分の周りにイスラエルの民を新たに形づくろうとしておられることを示していたのです。

この象徴の一時的な役割は、使徒の働き1章で確認されます。そこでペテロは、ユダの後継者について指示を与えています。後継者は、イエスの公の働きの全期間を通じて弟子の群れに属していた男性でなければなりません（使徒1:21-22）。これは一度限りのことです。

十二人の象徴性と同じ重みを持つ、聖書の中の対となるものがあります。それはイエスの復活のときに現れます。すなわち、イエスをご自分が死者の中からよみがえったことを証しする最初の者として、意図的に女性たちを選ばれたことです。それは、マタイの福音書28章、ルカの福音書24章、ヨハネの福音書20章の復活の記事に見ることができます。この象徴的な行為は、創世記3章の災いが今や正されつつあることを示しています。トマス・アキナスが——アダムに禁断の実を食べさせたエバを念頭に置いて——こう言ったとおりです。

「死のことは最初に告げたのが一人の女であったように、いのちのことは最初に告げるのもまた一人の女であった」（トマス・アキナス『ヨハネ福音書註解』、ヨハネ20章についての第3講）。

## コリント人への手紙第一7章

次に、結婚をテーマとする新約聖書の中で最も長い箇所、コリント人への手紙第一7章に移ります。

これは聖書の中で、結婚における権威について、また結婚においてどのように決定が下されるべきかについて、はっきりと語られている唯一の箇所です。

コリント人への手紙第一7章で、夫は妻が持っていない権威を持っているのでしょうか。いいえ。二人は一体です。4節でパウロは、夫の権威と妻の権威について、まったく同じ言葉を用いています。二人の権威は相互的なのです。

コリント人への手紙第一7章で、夫は決定を下す者でしょうか。いいえ。5節でパウロは、共に祈りに時間を費やすことについての決定や、性的な交わりについての決定は、互いの合意によってなされるべきだと言っています。それが結婚における相互性です。

## エペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章

エペソ人への手紙5章21節で、パウロはすべての信者に互いに従うことを呼びかけています。各自が他の人に自分を従わせるのです。

一部の解釈者は、夫が妻に対する関係については例外を設けています。しかしパウロはそうしていません。神のことは、そのような例外は定められていないのです。

パウロは21節ですべての信者に互いに従うよう呼びかけた後で、なぜ22-24節で、妻たちに夫に従うようわざわざ思い起こさせているのでしょうか。おそらくエペソの一部のキリスト者の妻たちは、キリストにあって新たに得た夫と対等な立場が、従わないこと、また夫を敬意をもって扱わないことの理由になると考えたのでしょう。パウロは彼女たちに、キリストへの畏れをもって従い、夫を敬うよう思い起こさせているのです。

この箇所ではパウロは、夫が妻に対してどのようにふるまうべきかを明らかにするために、かしら（頭）の比喻を用いています。それは支配の比喻ではなく、私たちが「救い手の役割」と呼べるものの比喻です（5:23参照）。彼が考えているのは、かしらがからだと結びついているとき、かしらは何をするか、ということです。かしらはからだを養い、世話をするのです。

彼の頭とからだの比喻は、頭がからだを養うという当時一般的だった考えに基づいています。キリストが自己犠牲の愛をもって、ご自分と結ばれたご自分の民を養われるように、夫もまた自己犠牲の愛をもって、一体として結ばれた妻を養い、世話をしよう召されているのです（5:25-33a）。

私は、パウロがここで、イエスが定められた原則を適用しているのだと考えます。

「多く与えられた者はみな、多くを求められ、多く任された者は、さらに多くを要求されます。」（ルカ12:48）

夫は、より大きな身体的な力と社会的な優位を持っています。それゆえ、妻に対する自己犠牲の愛と奉仕について、より大きな責任を負っているのです。それが、かしらとしての夫の役割の意味です。

ペテロの教えはパウロの教えと調和しています。ペテロの手紙第一3章で、ペテロは夫たちに、妻を謙遜に、思いやりをもって扱い、新しい永遠のいのちを共に受け継ぐ者として妻に敬意を払うよう命じています。

## 新約聖書における女性の奉仕

ペンテコステの日に聖霊がどのように注がれたかについての記事を注意深く読むと、聖霊の働きを見て取ることができます。女性たちは男性たちとともに、男女が混在する聴衆の前で、神の大いなるみわざを公に告げ知らせたのです（使徒1:14、2:1-18）。ペテロは預言者ヨエルを引用して、その出来事を説明しました。「あなたがたの娘たちは預言する」（使徒2:17）。

旧約聖書と同じように、しかし今やさらに強く、神ご自身が女性たちを動かして、男性にも女性にも公に仕えるようにされるのです。

使徒の働きでは、ペンテコステの後、女性たちがイエスのメッセージを広めることに積極的に関わっています（使徒8:1-4、18:18-26、参照：使徒11:20の「男たち」）。

書簡の中では、使徒ペテロも使徒パウロも、奉仕は霊的賜物に基づくものだと教えています。コリント人への手紙第一12章でパウロは、コリントの人々——男性と女性——に、使徒、預言者、教師というよりすぐれた賜物を熱心に求めるよう促しています。

賜物について教えているさまざまな箇所には、神が指導の賜物や教える賜物を男性にだけ与えるということを示すものは何也没有ありません（ローマ12:3-8、コリント第一12:1-30、エペソ4:11-13、ペテロ第一4:10-11）。そのような制限は、ガラテヤ人への手紙3章28節を考えると、かなり意外なことでしょう。

「ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」（ガラテヤ3:28）

新約聖書の賜物を与えられた女性たちには、ピリポの娘たちのような女預言者たち（使徒21:9）、女性執事フィベ（ローマ16:1-2）、女性教師マリアとプリスキラ、そして先駆的な女性使徒ユニアが含まれます（使徒18章、ローマ16:3-4, 6-7、クリュソストモス（Chrysostomos）『ローマ人への手紙についての説教』第31）。

コリント人への手紙第一11章では、女性と男性が共に、預言したり祈りを導いたりすることによって、地域教会で積極的な指導の役割を担っていたことがわかります。同様にパウロはコリント人への手紙第一14章26節で、「各自」が何らかの形で、教えることも含めて、積極的な貢献をすると言っています。

これが奉仕における相互性です。

## ヨハネの黙示録

男性と女性が共に導き、あるいは治めるという相互主義の見方は、黙示録5章の壮大な幻を指し示しています。

ヨハネの幻は、イエスの、すなわち小羊の偉大な贖いのみわざの結果を描いています。小羊はご自分の血によって、あらゆる部族、言語、民族、国民の中から人々を買い取られたのです。

「あなたは彼らを私たちの神のために、王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」（黙示録5:10）

こうして、創世記1章ですでに見た人類に対する神のご計画——男性と女性が共に治める者となること——が、ついに成就します。これは、男性だけではなく、信仰を持つすべての人が神の祭司として、地に対する神の支配を行使するという幻です。

これが積極的なメッセージです。結婚における相互性、奉仕における相互性、そして男性と女性が共に神の代理人となることです。

## 補完主義の見解についての十項目の評価

はっきり言っておきます。私は、補完主義の兄弟姉妹たちが信じていることの誠実さを疑っているわけではありません。しかし私が問うているのは、それらの見解が、聖書が実際に語っていることを忠実に再現したものとして正しいかどうか、ということです。

補完主義の教師たちは、女性も男性と同じように神のかたちに造られた人間であるという点で、相互主義者に同意しています。それにもかかわらず彼らは、男性が女性を善意をもって支配し、導き、女性の上に権威を行使し、あるいは女性のために決定を下すべきだと言うのです。

彼らは、男性の指導的役割についての本来の伝統的な根拠には依拠していません。もはや、女性は本性的に劣っているということが問題なのではありません。むしろ彼らは、神が男性と女性に

——結婚において、教会において、そしておそらくより広い意味での社会においても——異なる「役割」を割り当てられたと言うのです。

私たちは、補完主義の見方を聖書が語っていることと比較する十の論点を順に見ていきます。

しかしそうする前に、「役割」という言葉が聖書には出てこないことに注意すべきです。

女性についての教会の伝統的な多数派の見解が誤りであったと認められたとき、補完主義者たちは、「役割」という社会学的な言葉を用いて、女性を男性の指導の下に置くための新しい正当化を生み出しました。

男性と女性の「役割」というこの考えは、20世紀の発明でした。1世紀から19世紀までの聖書注解書には、それを示すものは何も見当たりません。ところが、1991年版の *Recovering Biblical Manhood and Womanhood* では、「役割」という用語が700回以上も使われているのです。

神は女性に男性と同じ道徳的・知的資質を授け、指導の賜物をお与えになったのですから、「役割」をいわゆる割り当てることに、もっともな理由はないように思われます——しかし、まさにその割り当てを彼らは教えているのです。

## 1) 創世記2章と3章

補完主義の学者たちの見解によれば、創世記2章と3章は、神が男性を、女性あるいは自分の妻に対して善意ある指導的役割を果たすよう定められたことを示しています。彼らは、これらの章に男性の指導についての「示唆」を見いだすと主張します。

関連する文献を調べてみたところ、さまざまな学者がこの二つの章における男性の指導の示唆として挙げている点が13ありました。

一つ例を挙げましょう。女は神によって男の「助け手 (Helperin)」として造られました。これが、男性の指導的役割を含意する示唆だということです。

もし創世記がもともと英語で書かれていたのなら、私たちはそこにそのような含意を見て取ることができたかもしれません。私たちは「helper (助け手)」という言葉で、たいてい従属的な補佐役という意味で使うからです。

しかし創世記はヘブライ語で書かれました。「助け手」にあたる言葉は *ezer* です。ヘブライ語では、神はイスラエルの *ezer* であるとしばしば言われます。しかしそれは、神がイスラエルを神の指導者に定めたということを示すものではありません！*ezer* という言葉のこの含意とされるものは、ヘブライ語には存在しないのです。

ここで13の示唆とされるものすべてを順に取り上げ、なぜそれらに問題があるのかを示すこともできるでしょう。しかし決定的な論点は別のところにあり、はるかに単純です。

決定的な論点はこうです。示唆とされるものだけでは不十分なのです。

もしだれかが、男性には女性を導くという神から与えられた義務がある、と主張するなら、私たちには問う権利があります。それはどこで男性に命じられているのか。それが神から与えられた

義務だと、どこで男性に告げられているのか、と。

創世記2章にも3章にも、男性へのそのような命令も、男性の義務についての言明もありません。それは聖書への付け加えなのです。

## 2) 旧約聖書全般

補完主義の学者たちの見解によれば、旧約聖書は、神が指導的役割を男性に限っておられたことを示しています。その際、彼らは男性の王たちと男性の祭司たちを指摘します。

王と祭司に依拠する彼らの論拠がなぜ説得力を欠くのかを論じることは有益でしょう。

しかし旧約聖書における決定的な論点のごく単純で、実際には指導的役割は男性に限られていない、ということです。私たちはすでに、デボラがモーセやサムエルに似ていることを確認しました。神がデボラをご自分の民の指導者として選ばれたことは、神が指導的役割を男性に限っておられたという考えと矛盾します。この規則は後から旧約聖書に付け加えられたものであり、旧約聖書には含まれていないのです。

そして、もしだれかがこの論拠を持ち出すなら……いいえ——成功した女性指導者を立て、その下で国が40年間平和であったことが、何らかの形でイスラエルに対する神の罰であったことを示すものは、本文の中にまったくありません。神も民も、指導者としてのデボラに対して何の留保も表明していません。

## 3) イエス

イエスが女性をどのように扱われたか、またイエスが十二人の男性使徒を選ばれた理由についてのさまざまな説について、詳しく論じることできるでしょう。しかし福音書における決定的な論点は、イエスの教えについての二つの事実にあります。

事実1：イエスは弟子たちに、意図的に、将来の世代にとって意味を持つことになる多くの時代を超えた命令をお与えになりました。

大宣教命令は、将来の弟子たちに、新しい弟子をつくり、「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教え」ることを求めています（マタイ28:20）。ですから、忠実な弟子であるためには、私たちはイエスが何を命じられたかに細心の注意を払わなければなりません。

事実2：イエスがお与えになった時代を超えた命令の中には、指導についての命令、結婚についての命令、弟子であることについての命令がありました。しかしイエスは、教会においてであれ、結婚においてであれ、その他の場においてであれ、指導は男性だけのものだという命令を、意図的にお与えになりませんでした。

補完主義者は、少なくとも結婚と教会においては、男性が指導することが重要だと信じています。しかし、私たちの指導者であり主であるイエスは、この確信を共有しておられなかったようです。もしそれが重要であったなら、イエスはそれを教えておられたでしょう。イエスはそうなさいませんでした。

#### 4) コリント人への手紙第一7章

この章全体が、男女の関係における完全な同権についてのパウロの見方をいかに明らかにしているかを論じることは、示唆に富むことでしょう。しかし核心を取り出すために、5節だけに焦点を当てることにします。そこでパウロはキリスト者の夫婦に、性的な交わりについて、また共に祈る時間について、どのように決定すべきかを指示しています——互いの合意によって、です。

補完主義者は、この指示は夫の指導的役割と決定の責任に対する特別な例外である、と主張せざるを得ません。

しかし、特別な例外という考えは意味をなしません。ここで扱われているのは重要な——いや、中心的でさえある——事柄です。性的な交わりは、結婚を他のすべての関係から区別する身体的な親密さです。共に祈ることは、結婚の霊的な中心です。もしこうした中心的な身体的・霊的事柄についての決定が互いの合意によってなされるべきだとしたら、夫婦関係の他の、それほど重要でない面においては、夫が何らかの形で指導的役割を担い、決定を下すべきだと論じることに、どうして意味があり得るでしょうか。

これにもっともな答えを出すことはできません。

1988年、補完主義の立場はダンヴァース声明（Danvers Statement）の中で注意深く書き記され、多くの著名な牧師や神学者がそれに署名しました。しかしこの点において、ダンヴァース声明はまったく破綻しています。それは、この重要な聖書箇所が存在さえ認めていないのです。

#### 5) エペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章

エペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章には、十分な理由をもって論じることのできる興味深い事柄がいろいろあります。エペソ人への手紙5章23節の「かしら」の比喻でパウロが何を意味しているのかについての対立する見解を論じることでもできるでしょう。サラがアブラハムを「主人」と呼んだこと——それは彼女が信じられずに笑いながら、心の中でつぶやいたことでした——にペテロが言及していることについての、さまざまな説明を論じることでもできるでしょう（ペテロ第一3:6、創世記18:12）。しかし決定的な論点のためには、パウロが「かしら」で何を意味したのかを扱う必要も、ペテロの論証の細部を解釈する必要もありません。なぜなら決定的な論点は、パウロとペテロが何を言っているかではなく、**彼らが何を言っていないか**にあるからです。

エペソ人への手紙5章とペテロの手紙第一3章をくまなく調べて、夫が妻を支配し、導き、妻の上に権威を行使し、あるいは妻のために決定を下すべきだという夫への指示を探すことはできません。しかし私たちはそれを見つけることはないでしょう。そのような指示は存在しないからです。

パウロは夫たちに、妻を愛するよう求めています。彼はそれを三度言っています。ペテロは夫たちに、妻を思いやりをもって扱い、妻を尊ぶよう求めています。しかし、どちらの使徒も、補完主義者が掲げている指示を男性に与えてはいません。

ダンヴァース声明は、妻を導くという男性のいわゆる義務を、非常に重要なものとして描いています。それは、指導の義務を怠ったり否定したりすることが、家庭に破壊的な結果をもたらすと

主張しています（ダンヴァース声明、確認事項10）。しかし、神の命令をでっち上げ、それに従うことが男性にとって非常に重要だと主張することは正当ではありません。

補完主義者が、神は夫が妻を支配し、導き、妻の上に権威を行使し、あるいは妻のために決定を下すことを求めておられる、と言うとき、彼らは神のことばに人間の伝統を付け加えているのです。

## 6) 新約聖書における女性の奉仕

新約聖書における女性の奉仕に関して、補完主義の解釈者たちの一般的なアプローチは、女性たちが行ったことを格下げしたり、軽く扱ったりすることです。

彼らの解釈の弱点については、言えることがたくさんあるでしょう。しかし最も明白で最も重要な論点は、使徒の働き18章でアポロを教えるプリスキラの例について、彼らが抱えている難しさです。

彼らはこう言います。「いや、あれは数人のただの信者同士の、私的な神学会話にすぎなかったのだ」と。しかし文脈に注意を払うなら、この説明では不十分です。

この話を読んだことのある人なら、何が起こるかを知っています。

三人からなる教会開拓チーム——パウロ、プリスキラ、アキラ——がエペソに到着します。パウロは会堂で福音を宣べ伝えることができ、そこでユダヤ人たちから好意的な反応を受けます。彼らはパウロにとどまって教え続けてほしいと願いますが、パウロは旅を続けることにします。

では、パウロが旅立つとき、新しい信者の群れの世話をするためにだれをそこに残すのでしょうか。それはプリスキラとアキラに違いありません。彼らは、残ったチームの二人のメンバーなのです。

アポロがやって来たとき、プリスキラとアキラは彼が語るのを聞いて懸念を抱きます。アポロは学識があり力強い語り手でしたが、神の道をもっと正確に理解する必要がありました。そこでプリスキラとアキラは彼をわきに呼んで、教え諭すのです。

初期の数世紀の注解者たちは、プリスキラが主導的な教師であったために、彼女の名前が夫の名前よりも先に挙げられていることをよく理解していました（たとえば、クリュソストモス『ローマ人への手紙についての説教』第30、クリュソストモス『プリスキラとアキラについての第一説教』）。

では、なぜ影響力のあるアポロが、プリスキラとアキラに耳を傾けたり、そもそも彼らに注意を払ったりするのでしょうか——しかも主たる教師は女性だということに。それは彼らが、新しい信者たちを教え、世話するためにパウロがそこに残していった、パウロの同労者だからです。

彼らがアポロを正すとき、それは単に任意の信者同士の私的な会話ではありません。新しい信者たちの霊的な世話に責任を負う、残されたチームのメンバーとして、彼らは自分たちの権威を行使して彼を正しているのです。

ルカがこの話を挿入しているのは、パウロが自分の訓練した男女の同労者たちを通して、どのように自分の働きを広げていったかを示すためです。それは、パウロがテモテへの手紙第二2章2節でテモテに語っている方法を具体的に示しています。

「多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい。」(テモテ第二2:2)

信頼できる人々、あるいは人たちとは、男性たちではなく、女性たちと男性たちのことです。この節には性別の限定はありません。

## 7) コリント人への手紙第一11章

コリント人への手紙第一11章2-16節は、髪型あるいは頭のかぶり物についての難しい聖書箇所です。

パウロは男性にも女性にも、彼らが預言したり声に出して祈ったりして教会を導く場合について、いくつかの是正の指示を与えています。コリントの人々は、コリントで、また自分たちの教会で何が起きているかを知っていましたから、彼らにとってパウロの指示を理解するのは難しくなかったはずです。しかし私たちにとっては、もっと難しいのです。その背景については多くの議論があります。

補完主義者はこの箇所を、指導的役割についての彼らの神学のために用いています。彼らは3節のパウロの「かしら」の比喻を議論の余地のある仕方で解釈し、10節に言葉を付け加え、そうして意味をねじ曲げて、そこに実際に書かれていることと正反対のことを言わせているのです。

私の新しい本の中で、私はこの章の解釈を提案しています。それはフィル・ペイン (Phil Payne) の大きな助けを得て生まれたもので、すべてが意味をなして組み合わせる解釈です。また私は、この箇所についての補完主義の解釈が、パウロの実際の言葉と矛盾している八つの点を挙げています。

しかし、ここでそれに詳しく立ち入る必要はありません。なぜなら決定的な論点は、先に述べたように、非常に単純だからです。この箇所をどのように解釈するにせよ、明白で否定できない事実は、パウロがコリント人への手紙第一11章で、女性の奉仕の範囲に何の制限も設けていないということです。

パウロは、女性が男性の前でも女性の前でも預言することを肯定しています。女性が男性と女性のいるところで声に出して祈ることを肯定しています。彼は女性に、説教することも、男性を教えることも、牧師の務めを果たすことも、教会を指導することも、その他どのような奉仕の働きも禁じていません。

女性の奉仕に対する補完主義的な制限は、この箇所には存在しないのです。

## 8) コリント人への手紙第一14章34-35節

これらの節は、三度、三つの異なる仕方で、女性は教会で完全に黙っていなければならないと述べています。

エルバーフェルト訳CSV版（Elberfelder CSV）〔ドイツ語聖書翻訳〕は、34-35節を次のように訳しています。

[1] 女たちは集会では黙っていなさい。

[2] 彼女たちには語ることが許されていないからです。むしろ、律法も言っているように、従いなさい。

[3] もし何かを学びたいのなら、家で自分の夫に尋ねなさい。女が集会で語ることは恥ずべきことだからです。

これらの言葉について最も注目すべきことは、それがパウロ自身の見解を表していないということです。

パウロは11、12、13、14章で、集まった教会における男性と女性の言葉による貢献が、彼らの霊的賜物にしたがって、どのように秩序づけられるべきかを教えてきました。それは、彼らの貢献が尊く、愛に満ち、ふさわしい秩序のうちになされるためです。しかし、もし女性に語ることが許されていないなら、女性は自分の賜物にしたがって言葉による貢献をすることなどできません！

補完主義の解釈者の多くは、パウロがこれらの節が実際に言っていること——女性は教会で黙っていなければならない、語ってはならないということ——を意味しているはずがないことを、あっさりと認めています。

補完主義の主流の学説は、パウロがここで禁じようとしているのは女性のある特定の種類の発言——すなわち預言を判断したり評価したりすること——だけであり、それが彼らの考えでは「男性の指導的役割」に反するのだ、と言います。しかしこの学説は維持できません。それは、強調され、無条件に述べられている明確な言葉と矛盾するのです。

もし、預言を判断することが禁じられているという説が正しいとすれば、

- パウロは、女性に預言を判断することだけを禁じるつもりだったとされるのに、女性があらゆる種類の発言をすることを全面的に禁止するとはっきり言うことによって、聞き手を誤解させていることになります。
- さらに、全面的な禁止を特に強調するために三度も繰り返すことによって、聞き手をいっそう誤解させていることになります。
- 禁止は預言が判断されるときにだけ適用するつもりだったとされるのに、女性が教会にいるときに発言の禁止が適用されるとはっきり言うことによって、彼らを誤解させていることになります。
- 禁止の適用の唯一の具体例として、学びたいという願いから質問をすることを、非論理的に挙げていることになります。それは、彼が禁じようとしていたとされる行為とは別の行為です。
- だれが預言を評価すべきかについて、ちょうど29節で言ったばかりのことと矛盾していることになります。29節でパウロは、「ほかの者たち」が語られたことを吟味すべきだと言っています。

す——つまり、ほかの預言者たちが預言を吟味すべきだということです。その「ほかの者たち」には男性も女性も含まれます。

- 実際、11章から14章にかけての彼の教えの中心的な考え全体と矛盾していることになります。すなわち、教会のすべての部分がそれぞれの霊的賜物にしたがって貢献すべきだということ——それは、語る賜物を持つ女性はそれを用いるべきであり、黙っているべきではないということ——を意味します。

女性は預言を判断してはならないという規則は、本文には含まれていないのです。

ここに決定的な論点があります。この二つの節がまったく明確に語っていることを見るなら、この二つの節がパウロ自身の見解を表していないことを確信できるのです。

ここで何が起きているのかを理解するための現実的な可能性は、二つしかありません。

第一の現実的な可能性は、パウロが、次に言うこと（36–40節）で反論するために、ある特定の反対者のグループの言葉を引用しているということです。

第二の現実的な可能性は、この二つの節が後の時代の付加であるということです。それは、初期の写本の欄外の書き込みが、手紙が再び書き写される際に本文に取り込まれたことによって生じたものです。新約聖書の写本には、ほかにもそのような例があります。

説明を必要とする写本の特別な特徴のゆえに、私は第二の説——後の付加という説——がおそらく正しいと考えています。

ダンヴァース声明（Danvers Statement）は、賢明にもこの二つの節に依拠していません。それは賢明な控えめさです。なぜなら、これらの節をパウロ自身の見解を表すものとして解釈する満足のいく方法を見いだした人はだれもいないからです。それは、これらの節がパウロ自身の見解を表していないからなのです。

## 9) テモテへの手紙第一2章

テモテへの手紙第一でパウロはエペソにいるテモテに書き送り、偽りの教えとその結果にどう対処すべきかについて指示を与えています。

補完主義者の間で最も人気のある英語の聖書翻訳はESVです。ESVでは、テモテへの手紙第一2章12節はこうなっています。

「私は、女が教えたり、男の上に権威を行使したりすることを許しません。」

ドイツ語のエルバーフェルト訳CSV版は、これを次のように訳しています。

「しかし私は、女が教えることも、男を支配することも許さず、静かにしているように [と言います]。』

この節は補完主義の考え方において非常に大きな意味を持っています。なぜならこの節が、女性の奉仕に対する一般的な制限を正当化しているからです。

次の二つの節——13節と14節——は、アダムとエバに言及しています。12節についての補完主義の解釈は、パウロがここで一般的な行動規則——アダムとエバの物語の中で創世記に啓示された神のみこころに基づく規則——を定めているのだと理解します。彼らは、パウロが、女性に対する男性の権威という創造の原理に言及しているのだと信じています。

パウロがここで本当に創造の原理に言及しているのか、それともむしろ、惑わされた女性が男性を教えるときに生じる危険の例として用いるよう、テモテを促すためにアダムとエバの物語を引き合いに出しているのか、という重要な議論があります。

また、「権威を行使する」が正しい翻訳かどうかについても重要な議論があります。私の見るところでは、「圧倒する」とか「牛耳る」とか「支配する」といった訳のほうが良いでしょう。

さらに、11節と12節の単数形の「女」についても重要な議論があります。それは、パウロが名指ししたくないエペソのある特定の人物のことなののでしょうか。それとも、彼は何らかの一般的な言明をしているのでしょうか。もし一般的な言明をしているのなら、このグループを構成する女性たちとはだれなののでしょうか。すべての女性なのでしょうか。それとも、彼がちょうど9節と10節で語っていた、ある特定の裕福な女性たちなのでしょうか。

また、12節の「男」という言葉がなぜ単数形なのかについても重要な議論があります。補完主義者は、プリスキラがしたように女性が一人の男性を教えることは構わないが、女性が男性のグループを教えるべきではない、と言います——パウロはそのようなことは言っていないのですが。

しかし私たちの目的のためには、主な注意を12節の短い句、「しかし私は許さない」に向けることにします。

ギリシア語では、これはわずか二語です。ouk epitrepō です。これは文脈に応じて、「私は許さない」とも、「私は今は許さない」とも訳すことができます。

私は「私は今は許さない」のほうが文脈によく合うと考えますが、ここでは「しかし私は許さない」という訳にとどめておきましょう。

この小さな句、「私は許さない」すなわち ouk epitrepō は、補完主義の解釈にとって乗り越えられない障害となっています。なぜならパウロの言い回しは、彼が神の啓示されたみこころに基づく一般的な規則を定めているのではないことを、はっきりと示しているからです。

説明させてください。

男性の「かしらであること」についての補完主義の神学によれば、パウロは、女性が男性の上に権威を行使するのは誤りだと言っている（12節）。なぜなら神はアダムをエバより先に造られたからであり（13節）、この創造の順序から、女性が男性の上に権威を持つことは神のご計画に照らして誤りである、ということが導き出される、ということです。そこから、女性に対する男性の権威という神の創造のご計画に違反することは、男性と女性に対する神の啓示されたみこころに背くことに等しい、という結論になります。

神の啓示されたみこころに背くことは罪です。それを故意に行うことは、神に対する反逆です。それに応じて、ダンヴァース声明では、女性が「自分の役割の制限に抵抗する」ことは罪深いと

述べられています（ダンヴァース声明、確認事項4）。

しかし、もしパウロが、神の啓示されたみこころに対する罪深い不従順に等しいことについて語っているのだとしたら、パウロの言葉の選び方をどう説明すればよいのでしょうか。パウロには、罪を犯すこと、神に背くこと、あるいは反逆することへの許可を与えたり拒んだりすることはできません。パウロが述べていると補完主義者が主張する規定の文言は、パウロの「私は許さない」すなわち *ouk epitrepō* という言葉の選び方と矛盾しているのです。

想像してみてください。あなたが著名なキリスト教指導者で、たとえば人間のいのちの神聖さと殺人の罪深さを教えており、人間は神のかたちに造られているのだからと、創世記によって——創世記1章26-27節、同じく創世記5章3節、さらに創世記9章6節に書かれているとおりに——あなたの教えを裏づけているとします。あなたは本気で、次のように言ったり書いたりすることを想像できるでしょうか。「私は殺人を許さない。神は人をご自分のかたちに造られたからである」と。

教皇でさえそのような言い方をするとは考えにくいことです。それは、殺人が正しいか誤りかを決めるのはあなた（あるいは教皇）ではなく、それを許すか許さないかはあなた（あるいは教皇）の権限ではないからです。殺人は、人間に対する神の啓示されたみこころに反しています。神の啓示されたみこころに背くことは罪です。

もし何らかの理由で、禁止を表すのに「許す」という言葉をどうしても使おうと決めたとしても、あなたは非人称化することによって、それが一般的な規則であることを伝えるでしょう。たとえば「神のことは殺人を許していない」とか「殺人は許されていない」といった言い方です。

殺人の例は、創世記との関連があるのでよく当てはまります。殺人はもちろん極端な例です。しかし、神の啓示されたみこころに対する罪が大きい小さいにかかわらず、核心は同じままです。

さて、パウロが使徒として手紙を書き、その際、自ら建て上げた教会に対して霊的な権威を行使していることは認めます。しかし、たとえパウロが、男性と女性に対する神の啓示されたみこころを反映し、それを無視することが罪深く反逆的であるような、創造に基づく禁止を表そうとしているのだとしても、個人的に許可を拒むという彼の言い回しは極めて奇妙です。実際、それはまったく場違いであり、その異様さを十分に言い表す言葉を見つけるのが難しいほどです。

牧師として、あなたは自分の群れに「私はあなたがたが姦淫を犯すことを許さない」とか「私はあなたがたが盗むことを許さない」とは言わないでしょう。

聖書は書物の大きな図書館であり、多くの一般的な行動規則を含んでいます。しかし——驚くにはあたりませんが——創世記から黙示録まで、聖書のどこを見ても、だれかが過ちに対する一般的な禁止を「私は許さない」とか「私は今は許さない」という表現で言い表している箇所は一つもありません。それはまったく前例のないことなのです。

この根本的な異論に対して、補完主義の学者たちは何と答えているのでしょうか。男性と女性に対する神の創造のご計画に基づくとされる一般的な禁止について、このように前例がなく場違いな

言葉の選び方を、彼らはどう説明しているのでしょうか。

私は補完主義の学者たちの著作とマイク・ウィンガー（Mike Winger）の動画を調べましたが、それに対する答えを見つけることはできませんでした。（巻末注を参照。）<sup>1</sup>

補完主義の解釈は、パウロの言葉に合わないのです。

パウロの言葉の選び方についての自然な説明は、彼が一般的な行動規則や一般的な禁止を表しているのではない、ということです。そうではなく、偽りの教えの影響を食い止めるために、惑わされた女性たちのある特定のグループに制限を課しているのです。

ティム・マスカラ（Tim Mascara）が言い表したように、テモテへの手紙第一2章は設計図ではなく、絆創膏なのです。<https://timmascara.substack.com/p/reading-1-timothy-together-part-1>.

## 10) テモテへの手紙第一3章とテトスへの手紙1章

パウロはテモテへの手紙第一3章1-7節とテトスへの手紙1章5-9節で、長老にふさわしい人の基準を一覧にしています。

尊敬されている補完主義の学者の中には、これらの一覧が女性をはっきりと除外してはいないことを認める人もいます。しかし他の人々は、これらの一覧は確かに女性を除外していると論じます。パウロがそこで、字義どおりには「ただ一人の妻に属する男」と訳すことのできる表現を用いているからです。この表現はテモテへの手紙第一3章2節とテトスへの手紙1章6節に見られます。それは「ただ一人の妻の夫」、「妻に忠実な」、「一度だけ結婚した」、「配偶者に忠実な」、「結婚において忠実な」など、さまざまに訳されています。

テモテへの手紙第一3章の一覧は、さらに進んで候補者の家庭について述べており、両方の一覧が候補者の子どもたちについて述べています。

パウロがテモテへの手紙第一3章2節とテトスへの手紙1章6節で、男性にも女性にも当てはまる資質を表すために、男性形の言葉を総称的に用いているのかどうかについては、重要な議論があります。

また、一覧を導入する言葉——**dei**——の訳し方の可能性について論じることでもできるでしょう。この言葉は「必要である」とも「ふさわしい」とも意味し得るのです。

そして、歴史的背景についても重要な議論があります。

- もし旧約聖書においてすでに男性の指導的役割の例外があったのなら、そしてもしより広い社会においてもすでに例外があったのなら、そしてもしイエスと使徒たちの女性に対する姿勢が支配的な文化のそれよりも肯定的であったのなら、そしてもし女性たちが御霊の賜物を受け、それを用いていたのなら、そしてもし教会の中にプリスキラ、ユニア、ルディア、さらにニンファ、フィベなどの著名な女性たちがいたのなら、そのとき——もし教会における長老の職をすべての女性に禁じるという規則があったとすれば——それは疑いの余地がないように、非常にはっきりと表明されなければならなかったはずです。

しかし、ここで私たちの中心的な論点が来ます。決定的な問いはこうです。パウロは、テモテとテトスが考慮すべきふさわしい候補者についての指標を与えているのでしょうか。それとも、ある人が神の教会の長老としてふさわしいと見なされるために、あらゆる場合に欠かすことのできない、絶対的な前提条件を定めているのでしょうか。私たちの中心的な論点は、これらの一覧を絶対的な前提条件の一覧として読むことは意味をなさない、ということです。

パウロがコリント人への手紙第一7章で、主に仕える働きにとって独身であることの利点について書いていたことを思い出してください。拘束力のある前提条件として解釈するなら、パウロ自身が地域教会の長老の職にふさわしくないと見なされることになってしまいます。彼には妻がなく、家庭を営んでおらず、子どももいなかったからです。そして同じことが、妻も家庭も子どもも持たなかった主イエスご自身にさえ当てはまることになるでしょう。それはばかげた結論です。

これらの一覧は、一般的で絶対的な要件ではありません。それは、状況に応じてふさわしい、見込みのある候補者を示す指標なのです。

もしこれらの一覧が、配偶者や子どもや家庭を持たない人々を決定的に除外するために用いることができないのなら、女性を決定的に除外するために用いることもできません。

一覧をそれぞれの状況にふさわしい指標として解釈する私たちの理解は、二つの一覧の間の違いによって確かめられます。たとえば、エペソの教会はしっかりと確立していたので、パウロはテモテへの手紙第一3章6節で、候補者は新しく改宗した人であってはならないと言うことができます。しかし、テトスが長老を任命しなければならないクレタの教会は新しい教会です。ですから、テトスへのパウロの手紙にはそのような要件はありません。そのような要件があれば、どんな任命もできなくなってしまうからです。

## 二つの最も重要な論点

では、ここまで論じてきたことの中から、二つの最も重要な論点を取り上げましょう。

二つの最も重要な論点の選択は、補完主義者自身が自分たちの立場の中心と見なしているものから導かれます。

疑いなく、テモテへの手紙第一2章12節は、女性の奉仕に対する補完主義的な制限にとって最も重要な本文です。その中心的な重要性は、学者たちによっても、一般向けの教師たちによっても、しばしば強調されています。たとえば、ジョージ・ナイト（George Knight）は *Recovering Biblical Manhood and Womanhood* の中で、12節は「男性が教会における第一の指導者であることを主張する」「最も明確な言明」だと述べています（1991年版、359頁）。マイク・ウィンガー（Mike Winger）は、自身の動画シリーズ「*Women in Ministry*」の中で、テモテへの手紙第一2章は教会における女性の指導的役割を制限する「最も明確な」箇所だと述べています（第12部、*ALL The Debates over 1 Tim 2:11-15*、0:01および9:00～9:01）。

ですから私は、補完主義の著者や講演者たちが、12節についての私たちの中心的な異論に答えを持っていないことに、かなり驚かされています。その異論とは、「私は許さない」というのは、神

の啓示されたみこころを反映しているとされる一般的な行動規則——それを無視することが罪となるような一般的な規則——を導入するための正しい言い方ではない、という問題です。

もしこれが神からの一般的な規則であるなら、女が教えたり男の上に権威を行使したりすることを許さないのは神であって、パウロではありません！

補完主義者は、これがまさにそのような規則——神によって定められた一般的な規則——であると主張します。しかしそうだとすると、パウロが「私は許さない」と言うことは意味をなしません。それが神の律法であるなら、どうしてそれがパウロの方針決定であり得るのでしょうか。

補完主義者は、女性の教えと権威を制限するとされるテモテへの手紙第一2章12節のこの規則を、女性に対する男性の権威というより根本的な規則の延長と見なしています。アダムが最初に造られたのだから、男性が妻に対して、また女性に対して権威を行使する責任を負っているということが、どういうわけか導き出されるというのです。私たちの二つの最も重要な論点のうちの第二のものは、すべての中で最も重要なものです。それはこのより根本的な規則の根に迫るものだからです。

私たちの最も重要な論点は、女性を支配することが男性の務めであると男性に向けて語る神の教えが、聖書の中にまったく存在しないということです。

ジョン・パイパー（John Piper）は、ウェイン・グルードム（Wayne Grudem）と並ぶ補完主義の主要な設計者の一人です。彼は、ダンヴァース声明（Danvers Statement）は「預言的」であり、それは「妻を導こうとしない男性たちに対決を迫る」ものだと思っています（Piper, 「The Current State of Complementarity」, Desiring God のウェブサイト, 2022）。パイパーによれば、夫が妻に霊的な指導を与えることを怠るのは「壊滅的な罪」です（Recovering Biblical Manhood and Womanhood、1991年版、44頁）。

しかし、妻あるいは女性を導くという男性のいわゆる義務を怠ることが壊滅的な罪であるなら、なぜ創世記から黙示録まで、どの預言者もどの教師も、男性にそのような義務があることを男性にはっきりと指摘していないのでしょうか。

パウロはそれを言いませんでした。ペテロはそれを言いませんでした。イエスはそれを言われませんでした。神はそれを言われませんでした。

## 警告のしるし——赤信号

最後に、私の本「True Complementarity: The way of Christ for men and women」（『真の補完性——男性と女性のためのキリストの道』）の中で強調していることを、もう一つ挙げておきたいと思います。

聖書の中には、男性が女性を支配すべきだという命令をだれかが出している箇所が、実際に一つあることを思い出しましょう。その箇所はエステル記にあります。そしてその命令は、まことの神によって出されたものでも、神の名によって出されたものでもありませんでした。

それは異教の「知者たち」から出たものでした。その命令は、怒りに燃え、復讐心に満ちた異教の王によって出されたのです。彼の王妃は、酔った勢いで出された彼の命令——国の宴会で見せ物のようにさらされ、酔った客たちにじろじろ眺められること——に従うことを勇敢にも拒んだのでした。

エステル記1章22節で、クセルクセス王（アハシュエロス王）の命令は、すべての男が自分の家の主人となるべきだというものでした。それはとりわけ、すべての男が自分の妻を支配すべきだということを意味していました（16–20節参照）。

王の怒りが収まった後、彼は制度化された性的搾取に没頭しました。帝国のすべての州から、容姿の美しい処女たちが彼のもとに集められました。そして彼は毎晩一人の若い女性、一人の処女を犯し、その後その女性を「お下がり」のための後宮の区画へと追いやりました——呼ばれない限り二度と会うことはありませんでした（エステル記2章）。

この命令を出したのは、そのような男でした。異教徒であり、連続強姦者であり、忌まわしい性犯罪者——彼こそが、男性に女性の上に権威を行使するよう命じている、聖書の中で唯一の人物なのです。

これ以上ははっきりした警告のしるしは、ほとんど想像できません。

彼が男性の力を卑劣に濫用したことは、創世記3章16節の神の警告を暗く裏づけるものです。男性による女性の支配は、人間の不従順の結果です。それは男性に対する神の命令ではありません。

### さらなる学びのために

For more on the traditional majority view of women's inferiority, and its rejection, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapter 2.

For more on the complementarian concept of “roles”, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapter 7.

For more on Genesis 2 and 3, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 5 and 6.

For more on women in the Old Testament, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 7 and 8.

For more on Jesus, the Twelve, and the Gospels, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 3 and 4.

For more on 1 Corinthians 7, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapter 9.

For more on Ephesians 5, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 10 and 11.

For more on 1 Peter, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapter 12.

For more on the New Testament ministries of women, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 13 to 17.

For more on 1 Corinthians 11:2–16, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 18 to 20.

For more on 1 Corinthians 14:34–35, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 21 and 22.

For more on 1 Timothy 2, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapters 23 to 29.

For more on elders' qualifications in 1 Timothy 3 and in Titus 1, see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapter 30.

If you are concerned about the impact of culture on interpreting the Bible, and about “slippery slopes” (where one change of view leads to another), see True Complementarity: The way of Christ for men and women (Apollos, 2026), chapter 31.

## お問い合わせ

ご質問やご意見は、お問い合わせフォームからお寄せください。

---

## 注

1. 説明が欠けていることについては、以下を参照。Hurley, Man and Woman in Biblical Perspective, 1981: 200–2; Recovering Biblical Manhood and Womanhood, 1991: 180–1 (Moo); Knight, The Pastoral Epistles 1992: 140; Mounce, Pastoral Epistles 2000: 120–3; Grudem, Evangelical Feminism and Biblical Truth 2004: 65–9, 299–302; Blomberg, Two Views on Women in Ministry 2005: 168; Sandom, 「Different by Design」 2012: 154–60; Köstenberger および Köstenberger, 「God's Design for Man and Woman」 2014: 205–12; 「Women in The Church」, 第3版: 155–61 (Köstenberger), 188–90 (Schreiner); Smith, God's Good Design 2019: 第2章; Grudem, Systematic Theology, 第2版 2020: 1152, 1161; DeYoung, Men and Women in the Church 2021: 79–80; Kuruvilla, 1 and 2 Timothy, Titus 2021: 4.2.1–2節。ヤーブロー（Yarbrough）(The Letters to Timothy and Titus 2018: 175) は、この難点に直接は触れていませんが、パウロの主旨は「教会の礼拝において有効であった役割分担をテモテに思い起こさせる、配慮ある言い方である」と述べています。しかし、これは説得力がありません。もし女性が教えることを禁じるのがパウロの通常の慣行であったなら、それをテモテに思い起こさせることは配慮ある言い方にはならないでしょう。比較してみましょう。性的不品行を非難することは彼の通常の慣行でしたが、彼が配慮から「私は性的不品行を許さない」とテモテに書き送るなどとは、本気で想像することはできません。さらに、この手紙におけるパウロの配慮は、不適切なふるまいをしている裕福な女性たちを名指ししないところに表れています。一方でテモテに対しては、彼は一貫してかなり率直なのです（1:3、18-19、3:15、4:6-7、11-16、5:1、21-23、6:2、11-14、20-21参照）。

注309でヤーブローは、「『許す』」が使われている二つの箇所を挙げていますが、それらはむしろ難点を際立たせています。(1) コリント第一14:34の「許されていない」は三人称の受動態であり、「私は許さない」とは対照的に、権限ある権威によって定められた一般的な規則を述べるのに適しています。(2) コリント第一16:7でパウロは、いつかコリントの人々を訪ねたいと望んでいると言い、「もし主が許してくださるなら」と述べています——それは、主がある時にはなさるかもしれないが、別の時にはなさらないかもしれないことです。私はこの「私は許さない」の問題を、Bartlett, Men and Women in Christ: Fresh Light from the Biblical

Texts 2019: 220 で取り上げました。私の知る限り、私の本と取り組んだ補完主義寄りの書評者で、これに答えた人はいません。マルコ10:4でパリサイ人たちが語っていること（「モーセは、離縁状を書いて妻を離縁することを許しました」）や、マタイ19:8でイエスが語っておられること（「モーセは、あなたがたの心が頑ななので、妻を離縁することを許したのです」）を指摘する人もいるかもしれません。この言及は、申命記24:1-4にあるモーセの律法の規定の効力にかかわるものです。その規定は、妻を離縁した男が後に彼女と再婚することを禁じており、そのことは離縁が容認されていたことを含意していました。そしてイエスは、なぜそうであったのかを説明しておられるのです。しかしここでの「モーセ」は「モーセの律法」を意味する省略的な表現であり、これらの本文は一人称（「私は許す」）を用いていません。実際、モーセの律法のどこにも「私は許す」とか「私は許さない」とは書かれていませんし、イエスご自身も、行動規則を示すときにそのような表現を一度も用いておられません。